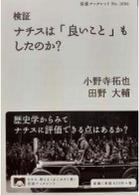


読書会読書グループのための  
十冊文庫目録 追録 No.39 (令和五年度)

千葉県立図書館 令和六年三月現在

【新規購入タイトル】

書名・著者	解題
<p>硫黄島上陸 友軍八地下二在り 酒井 聡平 著</p> 	<p>現地での戦死者二万超のうち、いまだ一万人以上の遺骨が見つかっていない硫黄島。戦死者達は一体どこに眠っているのか。なぜ未だに遺骨の多くは発見されていないのか。遺骨収集団として硫黄島に四度上陸し、日米の機密文書も調査した新聞記者が、「硫黄島の戦い」の謎を追ったルポルタージュ。</p> <p>令和五年刊 三三五頁 講談社</p>
<p>検証 ナチスは「良いこと」もしたのか？ 小野寺 拓也 著</p> 	<p>「ナチスは良いこともした」という議論は国内外で定期的に繰り返されるが、それは正しい言説なのか。功績とされがちな事象をとりあげ、ナチズム研究の蓄積をもとに、事実性や文脈を検証。歴史修正主義が影響力を持つなか、多角的な視点で歴史を考察することの大切さを訴える。</p> <p>令和五年刊 一一九頁 岩波書店</p>
<p>植物少女 朝比奈秋 著</p> 	<p>美桜が生まれた時からずっと、母・深雪は植物状態だった。成長する美桜と時が止まってしまった母親の関係は、時間が経つにつれて少しずつ変わっていく。現役医師でもある著者が、唯一無二の母子の在り方を丁寧に描いていく。「生」とは何かを考えさせられる作品。</p> <p>第三六回 三島由紀夫賞 令和五年刊 一七八頁 朝日新聞出版</p>
<p>他者の靴を履く ブレイディ みかこ 著</p> 	<p>「他者の感情や経験などを理解する能力」であるエンパシーと、「私が私自身を生きる」アナキズム。二つが邂逅し、融合していく思索の旅を著す。現代社会の様々な思い込みを解き放ち、〈多様性の時代〉のカオスを生き抜くための本。</p> <p>令和三年刊 三〇二頁 文芸春秋</p>
<p>鉄道小説 乗代雄介 ほか 著</p> 	<p>個人史と鉄道のさまざまな風景が交差する「人と鉄道の記憶」についての物語を集めた小説集。主人公が飼い犬と共に地元の思い出を辿る「犬馬と鎌ヶ谷大仏」(乗代雄介)、第四七回川端康成文学賞受賞作の「反対方向行き」(滝口悠生)等、五編を収録。</p> <p>令和四年刊 二五三頁 交通新聞社</p>
<p>業平 小説伊勢物語 高樹のぶ子 著</p> 	<p>歌物語の不朽の名作である「伊勢物語」を、現代小説という手法で蘇らせた長編作品。主人公とされる九世紀の歌人在原業平の生涯を、色恋の和歌を中心に据えてみやびな語り口調の文体で鮮やかに描く。登場人物の色香や千年かけて育まれた日本人の美意識が詰め込まれた作品。</p> <p>令和二年刊 四五八頁 日経BP 日本経済新聞出版本部</p>

<p>書名・著者</p>	<p>解題</p>
<p>ハンチバック 市川沙央 著</p> 	<p>先天性の疾患による側弯症を抱える井沢積華は、グループホームの十畳ほどの部屋でこたつ記事を書き、通信制大学に通い、夜は「小説を投稿する日々を送っている。ままならぬ身体を描ききる筆致と作品を貫く鋭いユーモアで、文学界に衝撃を与えた作品。」 第一六九回 芥川賞 第一二八回 文藝界新人賞 令和五年刊 九三頁 文芸春秋</p>
<p>光のところにいてね 一種 ミチ 著</p> 	<p>古びた団地の片隅で出会った結珠と果遠。全てが違う二人は互いに強く惹かれ合う。ずっと一緒にはいられないとわかっていながら。名前がつけられない感情を抱えた少女達の、四半世紀に及ぶ出会いと別れの物語。 令和四年刊 四六二頁 文芸春秋</p>
<p>牧野植物園 渡辺松男 著</p> 	<p>筋萎縮性側索硬化症(ALS)と闘いながら、人間と生き物を等しく扱った独特の自然観の短歌を詠む著者の第十歌集。牧野植物園に行った時の思い出を詠んだ一首など、口語やオノマトペを自在に使用して詠んだ、美しく生命力に溢れる歌が多数収録されている。 第七三回 芸術選奨文部科学大臣賞 令和四年刊 一八九頁 書肆侃侃房</p>
<p>窓ぎわのトットちゃん 黒柳徹子 著</p> 	<p>国民的ベストセラー『窓際のトットちゃん』の四十二年ぶりの続編。家族のこと、戦時中の生活、疎開した青森での出来事、学校での思い出、女優になった時のこと。「トットちゃん」の青春時代が、ユーモアあふれる文章で生き生きと綴られる。 令和五年刊 二五三頁 講談社</p>

【所蔵済み買替タイトル】

<p>書名・著者</p>	<p>解題</p>
<p>兎の眼 灰谷健次郎 著</p>	<p>新卒教師の小谷先生が受け持ったのは、学校で一言も口をきかない一年生の鉄三だった。心を開かない鉄三に打ちのめされる小谷だったが、次第に彼の豊かな可能性を見出していく。 平成十年刊 三三九頁 KADOKAWA</p>
<p>蟹工船・党生活者 小林多喜二 著</p>	<p>海軍の保護のもと、乗員に過酷な労働を強いて暴利を貪る蟹工船。人権を剥奪された労働者のストライキを扱う「蟹工船」と、近代的軍需工場の計画的な争議を描いた「党生活者」。日本プロレタリア文学の代表作を収録。 平成二十年刊 三〇〇頁 角川書店</p>
<p>金閣寺 三島由紀夫 著</p>	<p>吃音と醜い外貌に悩む学僧・溝口にとって、金閣とは「美」そのものだった。それなのになぜ、彼の中で憧れは憎しみに変わったのか。実際に起こった金閣放火事件を素材にした、三島文学の不朽の名作。 令和二年刊 三八三頁 新潮社</p>

※十冊文庫の「書名目録」は、千葉県立図書館のホームページからご覧いただけます。  
(トップページ左側「各種資料リスト」の「十冊文庫」のページに目録あり)

# 読書会読書グループのための 十冊文庫目録 追録 No.38

(令和四年度)

千葉県立図書館

令和五年三月現在

書名・著者	解題
<p>おいしいごはんが 食べられますように 高瀬 隼子 著</p> 	<p>料理上手で守ってあげたくなる存在の女性社員・芦川。食べることにまったく重きを置いていない男性社員・二谷。その同僚で何事も頑張ってしまう女性社員・押尾。ある日、芦川が早退のお詫びにと、職場に手作りスイーツを差し入れたところから、不穏なムードが漂い始める。「食」に対する違和感を軸に、わかり合えない人間模様を描く。 第一六七回 芥川賞 令和三年刊 一五二頁 講談社</p>
<p>嫌いなら呼ぶなよ 綿矢 りさ 著</p> 	<p>コロナ禍の日常を舞台とした4編を収録した短編集。美容整形した顔を同僚に「いじられてる」女、素人ユーチューバーへの応援が過熱していく女、妻の親友宅のパーティーで不倫を吊し上げられる男。こぞって被害意識を持ち、メールで闘い合う作家、ライター、編集者。「正しさ」の攻撃にも負けず、自身の欲望に忠実な主人公たちを描く。 令和四年刊 二〇七頁 河出書房新社</p>
<p>語学の天才まで一億光年 高野 秀行 著</p> 	<p>二五を超える言語を実際に現地で使用し、『謎の独立国家ソマリランド』や『西南シルクロードは密林に消える』等の著作を刊行してきたノンフィクション作家が、語学の魅力、ユニークな学習法、語学が少しでもできるとどんなことがわかるのかを現地での体験やエピソードを交えて紹介する。 令和四年刊 三三四頁 集英社インターナショナル</p>
<p>黒牟城 米澤 穂信 著</p> 	<p>時は本能寺の変を四年後に控える天正六年。信長に叛逆し有岡城に立てこもった荒木村重は説得に訪れた織田方の軍師、黒田官兵衛をとらえて幽閉する。村重が秘密裏に打ち明ける城内での不可解な事件を土牢の囚人、官兵衛が解き明かしていく戦国ミステリ小説。 第一六六回 直木賞 第二一回 山田風太郎賞 令和二年刊 四四五頁 KADOKAWA</p>
<p>生物はなぜ死ぬのか 小林 武彦 著</p> 	<p>遺伝子の仕組みの研究者が、「生物はなぜ死ぬのか?」「死」をどのように捉えるべきなのか?という疑問に対し、「ターンオーバー」、「進化」、「多様性」等をキーワードに生物学的見地から解説。アンチエイジングの最前線や「死なないAI」との付き合い方についても触れる。 新書大賞二〇二二 第二位 令和三年刊 二二七頁 講談社</p>
<p>月夜の森の梟 小池 真理子 著</p> 	<p>「年をとったおまえを見たかった」長年連れ添った夫・藤田宜永を肺がんで亡くした著者は、病と死にどう向きあい、見送った後どのように過ごしたのか。季節は流れ、森は変化していく。その日その時の風景、気持ち、二度と巡ってこない瞬間を綴る。『朝日新聞』連載を単行本化。 令和三年刊 一七二頁 朝日新聞出版</p>

書名・著者	解題
<p>同志少女よ、敵を撃て 逢坂 冬馬 著</p> 	<p>ドイツ軍によって母親や村人たちを惨殺されたソ連の少女・セラフイマが主人公。復讐を決意したセラフイマは、似たような境遇におかれた女性だけで編成された狙撃小隊に入り、過酷な訓練を重ねる。練度を高めた小隊はやがて、スターリンググラードの前線へ…。精密な戦場の描写とともに狙撃小隊が見つめた生と死、戦争の悲惨さを描く。</p> <p>第一一回 アガサ・クリステイー賞 本屋大賞二〇二二大賞 令和三年刊 四九二頁 早川書房</p>
<p>文にあたる 牟田 都子 著</p> 	<p>人気校正者によるエッセイ集。複数の辞書を使い分け、疑いながら何度も読み、古書店や図書館を巡り原典にあたる。十行足らずの文章をチェックするのに四日もかかるときもある。それでも読者に誤りを指摘されるのを想像するだけで胃が冷たい手でぎゅっとつかまれたような感覚になる。校正の難しさと面白さ、書物に対する想いを綴る。</p> <p>令和四年刊 一二五頁 亜紀書房</p>
<p>黛家の兄弟 砂原 浩太郎 著</p> 	<p>日本海沿いにあると思しき架空の神山藩。代々筆頭家老を務める黛家の三男・新三郎は大目付の黒沢家への婿入りが決まる。ところがある日、筆頭家老の地位を狙う漆原内記の策略で黛家の将来を揺るがす大事件が起き…。そして舞台は一三年後、二転三転するお家騒動とともに、己の無力さをつきつけられた若き武士・新三郎の成長を描く。</p> <p>第三五回 山本周五郎賞 令和四年刊 四一〇頁 講談社</p>
<p>目の見えない白鳥さんと アートを見に行く 川内 有緒 著</p> 	<p>「目が見えない」と「美術館が好き」という話が頭の中でつながらないまま、何も知らずに全盲の美術愛好家・白鳥さんと絵画展を訪れた著者は、意識が転換するような体験をする。「見る」ということ、アートの意味、生きるということ。白鳥さんとアートを巡って見えてきたことを綴る。</p> <p>二〇二二年本屋大賞ノンフィクション本大賞 令和三年刊 三三五頁 集英社インターナショナル</p>
<p>やさしい猫 中島 京子 著</p> 	<p>シングルマザーのミユキさんと八歳年下のスリランカ人、クマさんは、震災ボランティアで偶然出会い、惹かれ合っていく。娘のママも『やさしい猫』という民話を教えてくれたクマさんに懐き、三人で穏やかな日々が続くはずだったのだが…。入管法に翻弄される小さな家族が、どのように立ち向かっていくかを描いた長編小説。</p> <p>第五六回 吉川英治文学賞 令和三年刊 四一〇頁 中央公論新社</p>
<p>夜に星を放つ 窪 美澄 著</p> 	<p>星座の伝説と各内容をリンクさせた五編を収録した短編集。亡くなった妹を想いながらコロナ禍を過ごすOL、母親の幽霊が見える女子中学生、新しいお母さんのことをまだ「お母さん」と呼べない小学生。人生に戸惑う者たちが、再び希望を掴むことができるのかを問う。</p> <p>第一六七回 直木賞 令和四年刊 一二〇頁 文藝春秋</p>

※十冊文庫の「書名目録」は、千葉県立図書館のホームページからご覧いただけます。  
(トップページ左側「各種資料リスト」の「十冊文庫」のページに目録あり)

読書会読書グループのための  
十冊文庫目録 追録 No. 37

(令和三年度)

千葉県立図書館

令和四年三月現在

書名・著者

解

題

海をあげる

上間 陽子 著

「海に土を入れたら、魚たちは死ぬ？」 普天間基地の近くに住み、未成年の少女たちの支援・調査を続けている著者による初エッセイ集。暴力や貧困の中の若い女性たち、爆音の下で沈黙する人々、土砂が投入された辺野古の海。幼い娘のかたわらで沖繩を生きる痛みを、静かに強く綴る。

二〇二二年 本屋大賞ノンフィクション本大賞受賞

令和二年刊 二五一頁 筑摩書房

かか

宇佐見 りん 著

十九歳の浪人生うーちゃんが、独特な方言「かか弁」で語りかける形で物語は始まる。うーちゃんを取り巻く複雑な事情を持つ家族。鍵のかかったSNSの空間が抛り所の彼女。愛憎入り交じった感情を持ちつつも、心を病んだ母を救うため、ある祈りを抱え熊野へ向かう。

第五六回 文藝賞受賞 第三三回 三島由紀夫賞受賞

令和元年刊 一一五頁 河出書房新社

硝子戸のうちそと

半藤 未利子 著

作家の松岡護と夏目漱石の長女筆子の四女であり、昭和史研究家の半藤一利の妻である著者が、夏目一族の思い出、自身の住む家や町、友との関わり、そして、二〇二〇年に亡くなった、夫・半藤一利との別れを綴ったエッセイ集。『味覚春秋』『サンデー毎日』掲載されたもの書籍化。

令和三年刊 二六七頁 講談社

キラキラ共和国

小川 糸 著

祖母の跡を継ぎ、鎌倉で文具店を営む鳩子のもとには、今日も風変わりな代書の依頼が舞い込む。目の見えない少年から母への手紙、亡き夫からの謝罪の手紙、憧れの文豪からの手紙。家族になったQPちゃんともリカゲさん、ご近所のバーバラ婦人や男爵、さらには名前も知らない母親？も登場の『ツバキ文具店』続編。

平成二九年刊 二五一頁 幻冬舎

52ヘルツのクジラたち

町田 そのこ 著

52ヘルツの声で鳴く、世界で一頭だけの孤独なクジラ。その声は周波数が高く、他のクジラには聴こえない。家族に人生を搾取され、恋人にも裏切られたキナコ。心優しく愛情深いけれど、誰にも言えない秘密を抱えたアンさん。親に虐待され、「ムシ」と呼ばれている少年。彼らの52ヘルツの心の叫びが届きますように、祈りと希望の物語。

二〇二二年 本屋大賞受賞

令和二年刊 二六〇頁 中央公論新社

JR上野駅公園口

柳 美里 著

東京オリンピックの前年、男は出稼ぎのため、上野駅に降り立った。そして彼は彷徨い続ける。福島県に生まれ、数奇な運命を経てホームレスとなった彼。現在と過去が入り交じりながら進展していく物語に、読者は知らず知らずのうちに引き込まれていく。

二〇二〇年 全米図書賞(翻訳文学部門) 受賞

平成二六年刊 一八七頁 河出書房新社

書名・著者	解題
<p>自転しながら公転する 山本 文緒 著</p>	<p>舞台は茨城県牛久。東京で働いていた都は、更年期障害で苦しむ母の介護のため帰郷。地元のアウトレットモールで働き始める。仕事のトラブル、親の病气、先の見えない恋愛、次々と押し寄せる問題に直面する都。「自転しながら公転する」ぐるぐる迷いながら彼女が選択した未来とは。 第一六回 中央公論文芸賞受賞 令和二年刊 四七八頁 新潮社</p>
<p>自転車泥棒 呉 明益 著</p>	<p>その当時、自転車は高級品だった。数ヶ月稼いでやっと手にできる、それが自転車。二十年前、自転車とともに消えた父。大人になった「ぼく」の元には自転車だけが戻ってきた。激動の時代の台湾を自転車で通して巡る物語。 二〇一八年 国際ブックカー賞候補 平成三〇年刊 四三八頁 文芸春秋社</p>
<p>少年と犬 馳 星周 著</p>	<p>東日本大震災から間もない釜石。そこで出会ったその犬は、名を変え、在るところを変えて行く。出会う人に寄り添いながら。その犬はどこへ向かうのか。そして書名の「少年」とは。章ごとに語られる出会いと別れの物語。 第一六三回 直木賞受賞 令和二年刊 三〇八頁 文藝春秋</p>
<p>ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー ブレイディみかこ 著</p>	<p>大切なのは「違いがある」ことを理解すること。イギリスの街ブライトンで暮らす「ぼく」。アイルランド人の父と日本人の母を持つ中学生が考える差別とは？貧富の差とは？多様性とは？「ぼく」が日常で感じる思いを、両親に伝える言葉は真っ直ぐで、思慮深く鋭い。母親である著者が『波』で連載していたものを書籍化。 二〇一九年 本屋大賞ノンフィクション本大賞受賞 令和元年刊 二五二頁 新潮社</p>
<p>星落ちて、なお 澤田 瞳子 著</p>	<p>「画鬼」と称された絵師、河鍋暁斎の娘とよ。幼き頃から父の手ほどきを受け絵師となるが、多彩な才能の暁斎ほどの腕はなく、同じく絵師となった異母兄周三郎ほどの覇気はない。私立女子美術学校初の女性日本画教授であった彼女だが、絵を描くこと、女性として生きる社会からの制約などにも悩みながら、自分の人生を進んでいく。 第一六五回 直木賞受賞 令和三年刊 三二二頁 文藝春秋</p>
<p>類 朝井 まかて 著</p>	<p>森鷗外の末子、類を主人公にした長編小説。優秀な兄妹妹のなか、勉学、絵画、文学と何をやっても類の才能はなかなか芽がでない。さらに戦争によって財産が失われ妻子を抱えて困窮していく。名門に生まれたからこそ享受した喜びと苦悩、何かを成し遂げたわけではない人生を丁寧に描く。緑の濃淡が鮮やかな装画は類によるもの。 第三四回 柴田錬三郎賞受賞 第七一回 芸術選奨（文学部門）文部科学大臣賞 令和二年刊 四九四頁 集英社</p>

※十冊文庫の「書名目録」は、千葉県立図書館のホームページからご覧いただけます。  
(トップページ左側「各種資料リスト」の「十冊文庫」のページに目録あり)

読書会読書グループのための  
十冊文庫目録 追録 No.36

(令和二年度)

千葉県立図書館

令和三年三月現在

書名・著者

解

題

おぶおぶでひとりいぐも

若竹 千佐子 著

日々を重ねてはじめて手に入れられる感情がある。主人公の桃子さんは七十代。ひとり静かに暮らしているが、内から鳴り響く東北弁丸出しの言葉が、様々な記憶を呼び寄せる。飛び出した故郷、住み込みのアルバイト、結婚、育児、そして夫の突然の死。震えるような絶望の果てに桃子さんは何を手に入れたのか。老いを生きる意味を描いた話題作。

第一五八回 芥川賞 第五四回文藝賞受賞  
平成二十九年刊 一六四頁 河出書房新社

教誨師

堀川 恵子 著

十四歳の夏、故郷広島にて被爆し、上京後、半世紀に渡り「死刑囚教誨」を務めた僧侶渡邊普相。死刑制度が持つ苦しみと矛盾を一身に背負ってきた彼の人生を通じ、教誨の歴史や、拘留所内での死刑囚との会話、執行現場に関わる人々の葛藤など、本人へのインタビューにより知ることのできる一冊。

第一回 城山三郎受賞  
平成三十年刊 三五八頁 講談社(文庫)

源氏物語 下

角田 光代 訳

(日本文学全集06)

平安時代に紫式部によって書かれた日本古典文学の名著「源氏物語」を、直木賞など数々の文芸賞を受賞した作家 角田光代氏が、新たな視点で現代語訳した。下巻では、光源氏亡き後、その息子・薫や孫・匂宮を中心に、彼女たちの恋が描かれる。第四十二帖匂宮(におうみや)から最終帖の第五十四帖夢浮橋(ゆめのうきはし)までを収録。

令和二年刊 六三七頁 河出書房新社

沢木耕太郎セッションズ  
(訊いて、聞く) 1

沢木 耕太郎 著

「すべての始まりは会うことからだ。会う。逢う。遇う。遭う。人と人との関わりはその『あう』ことからしか始まらない。」  
「対談」と銘打たれて雑誌や新聞に掲載された、著者・沢木耕太郎と吉行淳之介、瀬戸内寂聴ら多様な分野の著名人十人との対話が集められて構成された本作。それぞれの対話を通して、各々の様々な考え、興味深いエピソードが語られる。

令和二年刊 三一〇頁 岩波書店

じんかん

今村 翔吾 著

『常山紀談』では信長から三悪事を働いた者と紹介され、後の世では梟雄と呼ばれ、浮世絵では白髪頭を振り乱し眼鏡く猛々しい姿で描かれる戦国の武将松永久秀。しかし、近年、猛々しさとは無縁の肖像画が発見され、研究者の手によってこれまでとは大きく異なる久秀像が分かってきた。久秀は何を思い、何をなしたか。改めて信長の口から語られる久秀とは。

新進気鋭の時代小説家が描く、現代版、松永久秀の物語。  
第十一回山田風太郎賞受賞

令和二年刊 五〇九頁 講談社

書名・著者	解題
<p>線は、僕を描く</p> <p>砥上 裕將 著</p>	<p>大学生の青山霜介は、アルバイト先で水墨画家の篠田湖山と出会い、その場で弟子にされてしまう。さらにその場にいた湖山の孫・千瑛と翌年の湖山賞をかけて勝負することに。水墨画など興味もなかった霜介は、次第にその世界に魅了されていく。水墨画とは線で命を描く芸術。両親を事故で失って以来、孤独の中にいた霜介は、水墨画をとおして生きる意味を見出していく。</p> <p>二〇二〇年本屋大賞二位</p> <p>令和元年刊 三一七頁 講談社</p>
<p>盤上の向日葵</p> <p>柚月 裕子 著</p>	<p>向日葵の花言葉は「あこがれ」。夏の青空に向かって燦々と輝くその花はゴッホの描く魔性の花。異端の天才棋士・上条桂介の人生は向日葵に支配されていく。幾重にも絡んだ壮絶な人生の糸が、そして事件の謎が解けようとしたとき、上条桂介は舞った、あこがれの向日葵に向かつて。誰が誰をなぜ殺したのか。真実は永遠の闇に葬られた。山形県天童市。美しい将棋の街で終わるはずだった壮絶すぎる物語。</p> <p>二〇一八年本屋大賞二位</p> <p>平成二十九年刊 五六三頁 中央公論新社</p>
<p>看取りの人生</p> <p>内山 章子 著</p>	<p>「後ろ姿を見て、生き方を学んでほしい」との言葉通りの最期を見せた父・鶴見祐輔（政治家、著述家）。最期に謝った母（後藤新平の長女）。死の直前まで和歌を書き留めさせた姉・鶴見和子（社会学者）。書くことと読むことを教えてくれた兄・鶴見俊輔（哲学者）。リベラルな家族の中「あなたは他の子と違う。あなたが我慢すれば鶴見家はうまくいく」と育てられ、黒子として生きた著者による回想録。伝記的事実からはうかがえない鶴見家のエピソードを綴る。</p> <p>平成三十年刊 一三三三頁 藤原書店</p>
<p>流人道中記 上</p> <p>浅田 次郎 著</p>	<p>万延元年、姦通の罪を犯した旗本・青山玄蕃に、御家存続と引き換えに切腹の沙汰が下る。しかし、玄蕃の答えは「痛えからいやだ」。結果、蝦夷福山への流罪となった玄蕃と、その押送人を命じられた十九歳の与力・石川乙次郎は津軽三厩への旅に出る。口も態度も悪い玄蕃だが、道中出会う様々な事情を抱えた人々を見逃さず、そして見捨てない。</p> <p>この男、果たして本当に罪人か。</p> <p>令和二年刊 三七一頁 中央公論新社</p>
<p>流人道中記 下</p> <p>浅田 次郎 著</p>	<p>流人・青山玄蕃と押送人・石川乙次郎の旅は続く。父の敵を七年も探し続ける浪人。無実の罪を着せられた少年。旅先で病に倒れ、「故郷の水を飲んで死にたい」と願う女。それぞれの事情に寄り添いながら、二人の旅は終わりへと近づいていく。その道中、玄蕃は乙次郎に自身の半生と罪の真実を語る。</p> <p>「武士が命を懸くるは、戦場ばかりぞ。」―玄蕃が、御家を潰しても生を選んだのはなぜか。</p> <p>令和二年刊 二九四頁 中央公論新社</p>

※十冊文庫の「書名目録」は、千葉県立図書館のホームページからご覧いただけます。  
 (どうぞご利用ください。  
 (トップページ左側「各種資料リスト」の「十冊文庫」のページに目録あり)

読書グループのための  
十冊文庫目録

追録 No. 35 (令和元年度)

千葉県立図書館

令和二年三月現在

書名・著者	解題
<p>ある男 平野 啓一郎著</p>	<p>自らの人生を別人の人生とそっくり入れ替えて生きるというこ とができたら……。一切の過去を捨て去ることができたとして、そ の後の人生は幸せなのだろうか。登場人物各々の目線を通じ、親 子の関係性、夫婦のあり方、血縁、自分自身とは何か、幸せに生 きるとはどんなことなのか。嫌でも読者は考えさせられるだろう。 平成三十年刊 三五四頁 文藝春秋</p>
<p>渦 妹背山婦女庭訓 魂結び 大島 真寿美著</p>	<p>人形浄瑠璃の演目の一つである「妹背山婦女庭訓」。昭和の初頭、 大阪は道頓堀の竹本座で上演されたこの演目は、浄瑠璃作家 近松 半二の代表作。 渦のように虚ろと現実、人間同士が絡み合う中で生まれる創作 と半二の生涯を軽快な大阪弁で描いた一冊。 第一六一回 直木賞受賞 平成三十一年刊 三六一頁 文藝春秋</p>
<p>江戸人の老い 氏家 幹人著</p>	<p>将軍、徳川吉宗の晩年は、病いと戦うリハビリ生活であった。 歴史学者が、江戸時代の著名な男性三人の老後生活を綴った史 料を丹念に調べ、説明しながら、現代にも通じる日本人の豊かな 「老人」の風景を浮かびあがらせる。私達が老後をどう生きるか を考える上で参考となる歴史書。 令和元年刊 二一九頁 草思社</p>
<p>昨日がなければ 明日もない 宮部 みゆき著</p>	<p>杉村三郎シリーズ第五弾。「杉村探偵事務所」に依頼人の女性が 現れる。一昨年結婚した娘・優美が自殺未遂を凶つたらしい。し かし一ヶ月以上、面会はおろかメールさえもつながらないという。 優美や夫の周辺を調べていくうち、杉村はある転落事故にたどり 着く。体育会系の同調圧力を背景に描く『絶対零度』の他、『華燭』 表題作『昨日がなければ明日もない』の二編を収録。 平成三十年刊 三九六頁 文藝春秋</p>
<p>源氏物語 中 角田 光代 訳 (日本文学全集05)</p>	<p>平安時代に紫式部によって書かれた日本古典文学の名著「源氏 物語」を直木賞など数々の文芸賞を受賞した作家 角田光代氏が、 新たな視点で現代語訳した。中巻では、玉鬘(たまかざら) から 幻(まぼろし)までを収録。「上巻は十冊文庫で利用可」 平成三十年刊 七〇四頁 河出書房新社</p>
<p>孤独という道づれ 岸 恵子 著</p>	<p>二四歳で渡仏し結婚。子育てや離婚、実母の介護などを経て、 六七歳で故郷横浜に生活の拠点を移した「女優岸恵子」の今を書 いた、十六編からなるエッセイ集。転んで大けがを負った後のテ レビ収録やカード詐欺、しわ取りについての美容整形外科医との やりとりなど、作者曰く『「晩年」と人の呼ぶ季節の生き方を「孤 独という道づれ」にくるまって書いた』文章で綴られている。 令和元年刊 二二五頁 幻冬舎</p>

書名・著者	解題
<p>水曜日の凱歌 乃南 アサ 著</p>	<p>第二次世界大戦後の日本には、政府によって作られた特殊慰安施設協会があった。慰安婦として生きざるを得ない女達。その通訳として、そして女として生きる母親。その母の元で暮らす自分。価値観が反転した世界で、多感な一四歳の少女 鈴子の見た戦後日本の女達が描き出される。 第六十六回芸術選奨文部科学大臣賞受賞 平成二十七年刊 七三六頁 新潮社</p>
<p>そして、バトンは渡された 瀬尾 まいこ 著</p>	<p>「バトン」は、いったい何だろう…。高校入学後の主人公優子と新たに継父となった森宮荘介の日常生活を中心に、幼少期の実母の死、父との別れ、その後の継母との暮らしなどの回想、そして優子の結婚式当日までが描かれる。結婚式当日、バージンロードを踏み出す直前、その「バトン」が何かが示される。 二〇一九年本屋大賞一位 令和元年刊 三七二頁 文藝春秋</p>
<p>宝島 真藤 順丈 著</p>	<p>米国統治下の沖縄。米軍基地や倉庫から物資を奪っては島民に分け与える「戦果アギヤー」達がいた。しかし、最強の戦果アギヤー・オンちゃん、嘉手納基地襲撃の最中、行方不明になってしまう。親友ダスク・弟レイ・恋人ヤマコは、彼を思い、その姿を追い続ける。やがてわかってきた消息と「予定にない戦果」とは。沖縄が抱える悲しみと怒りを、三人の若者をとおして描く。 第一六〇回直木賞 受賞 平成三十年刊 五四六頁 講談社</p>
<p>ほとほと 歳時記ものがたり 高樹 のぶ子 著</p>	<p>「ほとほと」とは季語、木戸を叩く音。幼い頃、竈屋の格子窓を開けると聞こえた風の音。その風が打つやさしい音が「ほとほと」だったか。日本人の持つ豊かな情緒は、季節の色や薫り、音、ふれあいといった五感でつくられる宝物。歳時記の季語をタイトルにした本著には、宝物が詰まっている。毎日新聞西部版に2年間掲載された短編連作。 平成三十一年刊 二八〇頁 毎日新聞出版</p>
<p>むらさきの スカート の女 今村 夏子 著</p>	<p>「むらさきのスカートの女」は一風変わり者。自称「黄色いカーディガンの女」である「わたし」が得体の知れないむらさきのスカートの女の生活や行動を淡々と語っていく。なぜ始終観察し続けられるのだろうか。「わたし」とはいったい誰なのか？ 正常と異常、狂気と滑稽さが交錯し、読後に不思議な余韻を残す『小説トリップ』掲載小説。 第一六一回 芥川賞受賞 令和元年刊 一六〇頁 朝日新聞出版社</p>

※十冊文庫の「書名目録」は、千葉県立図書館のホームページからご覧いただけます。どうぞご利用ください。  
(トップページ左側「各種資料リスト」の「十冊文庫」のページに目録あり)

